



ベラ科ホンベラ亜科（新称）のホンベラに適用すべき学名の検討

本村浩之¹

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp

Received 24 July 2026
Revised 26 July 2026
Accepted 27 July 2026
Published 28 July 2026
DOI 10.34583/ichthy.69.0_60

Hiroyuki Motomura. 2026. *Hemiulus bleekeri*, a valid species from Japan and Korea, applied to “Hombera” (Labridae: Julidinae). Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 69: 60–64.

Abstract

The species of wrasse known as “Hombera” (Labridae) in Japan had previously been assigned the scientific name *Halichoeres tenuispinis* (Günther, 1862) in most Japanese publications; however, Randall (1999) determined that *H. tenuispinis* is a species restricted to China and Taiwan, and applied the name *Halichoeres bleekeri* (Steindachner and Döderlein, 1887) (originally described as *PlatyGLOSSUS bleekeri*) to the species distributed in Japan and Korea. However, since *H. bleekeri* (Steindachner and Döderlein, 1887) was a junior homonym of *Halichoeres bleekeri* Günther, 1861, the former *H. bleekeri* is invalid until Near et al. (2025) changed its generic allocation. Near et al. (2025) conducted a comprehensive molecular phylogenetic analysis of the labrid fishes and re-constructed the subfamilies, tribes, and genera. The former genus *Halichoeres*, which includes “Hombera,” has been divided into six genera; 20 species belonging to four of these genera (*Halichoeres*, *Hemicoris*, *Hemitautoga*, and *Hemiulus*) are distributed in Japan. Although *H. bleekeri* is not listed in Near et al. (2025), since *Halichoeres tenuispinis* has been transferred to the genus *Hemiulus* and renamed *Hemiulus tenuispinis*, it is appropriate to designate the scientific name of “Hombera” as *Hemiulus bleekeri*.

ベラ科の一種ホンベラは、朝鮮半島南部、北海道南部から九州南部までの日本海と太平洋沿岸（岩手県と福島県を除く）、瀬戸内海、および大隅諸島種子島に分布する温帯性魚類である（島田，2013；百田・宗原，2017；鈴木ほか，2025；外山ほか，2025；本村，2026；本研究）。なお、本種の奄美群島喜界島からの記録（島田，2013；Fujiwara

and Motomura, 2020）は、藤原ほか（2022）によってヤマブキベラ *Gomphosus lutescens* (Lay and Bennett, 1839)（学名は Near et al., 2025 に基づく）の誤同定に基づくものであったことが明らかになり、ホンベラの琉球列島からの記録はなくなった。

ホンベラは背鰭棘数が9であること、背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ12であること、下顎中央部に切れ込みがないこと、両顎歯がすべて犬歯状歯であること、側線有孔鱗数が25あるいは26であること、頬部と主鰓蓋骨上部に鱗がないこと、背鰭起部が主鰓蓋骨後半部上方から始まること、尾鰭後縁が円いこと、頭部が薄赤色で2薄緑色縦線があること、背鰭第1–6棘の鰭膜に暗色斑があること（オス）、および体側に目立った模様がないこと（メス）などから日本産本科他種と識別される（島田，2013）。

ホンベラは他のベラ科魚類同様に性転換し、雌雄で体色が異なることから（Fig. 1）、メス、性転換中の個体、およびオスがそれぞれ別種として新種記載されたため、分類学的混乱が生じていた。さらに、Randall (1999)によって韓国・日本と中国・台湾に生息するホンベラがそれぞれ別種であることが明らかになったものの、前者に当てた学名が当時ベラ科他種の新参同名であったこともあり、混乱に拍車をかけることとなっていた。本研究ではこれらのホンベラに関わる学名の取り扱いの経緯を整理するとともに、近年のベラ科魚類における包括的な分子系統解析に結果（Near et al., 2025）に基づいて、ホンベラに適用すべき現時点におけるもっとも適切な学名を明らかにした。

なお、本研究では、旧ホンベラ属の細分化に伴う属の標準和名の整理を行うとともに、ホンベラが帰属する亜科 Julidinae にホンベラ亜科（新称）を提唱した。

材料と方法

標本の計数・計測は Hubbs and Lagler (1947) にしたがった。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した。計測はデジタルノギスを用い 0.01 mm 単位まで行い、小数第2位を四捨五入した。標本の作製，登録，撮影，お



Fig. 1. *Hemiulus bleekeri* from Kagoshima, Japan (A: KAUM-I. 223013, male, 125.0 mm SL, Kuronose Fishing Port, Yamadono, Naga-shima island; B: KAUM-I. 63243, female, 73.9 mm SL, off Bandokorobana National Park, Beppu, Ei, Minami-kyushu).

よび固定方法は本村（2009）に準拠した。本報告に用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館（KAUM）に保管されており、生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。標準和名の適用と提唱にあたっては「魚類の標準和名の命名ガイドライン」（日本魚類学会，2025）にしたがった。

本研究で用いたホンベラの標本（56個体，体長19.4–133.0 mm）は以下のとおり。山形県：KAUM-I. 26532，体長103.3 mm，酒田市飛島沖。島根県：KAUM-I. 80990，体長80.3 mm，隠岐郡西ノ島町別府港島前西ノ島；KAUM-I. 82023，体長97.5 mm，KAUM-I. 82024，体長99.8 mm，KAUM-I. 82025，体長95.3 mm，KAUM-I. 82026，体長73.8 mm，隠岐郡海士町菱浦港島前中ノ島。愛媛県：KAUM-I. 168655，体長100.7 mm，西宇和郡伊方町三机港。山口県：KAUM-I. 182853，体長48.4 mm，KAUM-I. 182854，体長44.8 mm，熊毛郡上関町長島田ノ浦；KAUM-I. 213598，体長52.9 mm，熊毛郡上関町祝島南東。福岡県：KAUM-I. 174134，体長96.7 mm，KAUM-I.

174155，体長92.4 mm，KAUM-I. 174156，体長101.3 mm，KAUM-I. 174157，体長98.4 mm，KAUM-I. 174158，体長86.8 mm，KAUM-I. 174159，体長103.0 mm，KAUM-I. 174160，体長114.4 mm，KAUM-I. 199785，体長118.3 mm，糸島市志摩野北野北漁港；KAUM-I. 192528，体長91.1 mm，KAUM-I. 187830，体長100.4 mm，KAUM-I. 187831，体長94.7 mm，KAUM-I. 187832，体長90.5 mm，糸島市姫島。長崎県：KAUM-I. 70122，体長59.3 mm，KAUM-I. 70129，体長30.4 mm，長崎市三重町の海岸；KAUM-I. 91252，体長92.6 mm，松浦郡小値賀島町柳郷柳港小値賀島；KAUM-I. 116798，体長91.2 mm，KAUM-I. 116799，体長92.6 mm，長崎市高島町高島飛島磯釣り公園；KAUM-I. 149094，体長112.7 mm，KAUM-I. 170048，体長116.0 mm，KAUM-I. 181230，体長93.7 mm，KAUM-I. 188616，体長133.0 mm，松浦市福島町鍋串漁港；KAUM-I. 214169，体長105.5 mm，平戸市田平町山内免野田港。鹿児島県：KAUM-I. 123851，体長103.6 mm，KAUM-I. 123852，体長116.7 mm，KAUM-I. 123853，体長92.8 mm，

KAUM-I. 223013, 体長 125.0 mm, 出水郡長島町黒之瀬漁港 (長島); KAUM-I. 161399, 体長 119.4 mm, 出水郡長島町諸浦薄井漁港 (長島); KAUM-I. 79615, 体長 22.6 mm, 薩摩川内市上甕町平良沖の串沖 (中甕島); KAUM-I. 79647, 体長 31.8 mm, 薩摩川内市里町里市の浦沖 (上甕島); KAUM-I. 89638, 体長 115.3 mm, 薩摩川内市里町里西港 (上甕島); KAUM-I. 24992, 体長 79.0 mm, いちき串木野市八房川河口; KAUM-I. 2975, 体長 90.3 mm, 南さつま市笠沙町片浦漁港内; KAUM-I. 6829, 体長 109.1 mm, 南さつま市笠沙町片浦崎ノ山東側; KAUM-I. 13737, 体長 34.2 mm, 南さつま市笠沙町黒瀬海岸; KAUM-I. 10756, 体長 58.6 mm, KAUM-I. 10759, 体長 75.5 mm, KAUM-I. 97598, 体長 67.6 mm, KAUM-I. 97599, 体長 38.3 mm, 南さつま市笠沙町大当漁港; KAUM-I. 56703, 体長 35.4 mm, KAUM-I. 63243, 体長 73.9 mm, KAUM-I. 65946, 体長 28.8 mm, 南九州市頴娃町別府番所鼻自然公園地先; KAUM-I. 15825, 体長 81.2 mm, KAUM-I. 16002, 体長 68.8 mm, 指宿市開聞脇浦花瀬; KAUM-I. 161103, 体長 19.4 mm, 鹿児島市古里町宮下港東沖 (鹿児島湾); KAUM-I. 176962, 体長 132.4 mm, 鹿児島市沖小島南方 (鹿児島湾); KAUM-I. 66293, 体長 23.6 mm, 熊毛郡中種子町牧川港沖 (種子島)。

ホンベラの学名遷移

Halichoeres tenuispinis (Günther, 1862) は 3 標本 (シンタイプ) に基づき中国沿岸 (Seas of China) から新種 *PlatyGLOSSUS tenuispinis* として記載された。次いで, *Halichoeres bleekeri* (Steindachner and Döderlein, 1887) が複数標本 (8 シンタイプ) が現存; Fricke et al., 2026) に基づき東京から新種 *PlatyGLOSSUS bleekeri* として記載され, 記載末尾に和名 Hombera と付記された。その後, *Halichoeres tremebundus* Jordan and Snyder, 1902 が日本産 15 標本 (Misaki, Hiroshima, Kobe, Wakanoura, Onomichi, and Nagasaki; ホロタイプと 5 パラタイプが現存; Fricke et al., 2026) に基づき新種として記載された。Jordan et al. (1913) は *H. bleekeri* (和名 Honbera) と *H. tremebundus* (Seto-bera) の両方を有効種として扱い, 前者は東京から長崎に, 後者は三崎から長崎に分布するとした。なお, *H. tremebundus* の原記載の線画 (Jordan and Snyder, 1902: 640, fig. 8) が Jordan et al. (1913: 203, fig. 148) に再掲された。

一方, Jordan and Hubbs (1925) は *H. tenuispinis* を有効種として扱い, *H. bleekeri* とは区別できない旨を記したが, *H. tremebundus* への言及はなかった。松原 (1955) はホンベラ *H. tenuispinnis* [sic] を有効種として扱い, 新参異名として *H. bleekeri* と *H. tremebundus* を併記し, それぞれの名義種はホンベラの性転換中の個体, オス個体, およびメス個体に基づいて記載されたと判断した。Kamohara (1958) も *H.*

tenuispinis を有効種かつ Hon-bera として扱い, シノニムリスト内で *H. bleekeri* と *H. tremebundus* を *H. tenuispinis* の新参異名として扱った。Randall (1999) は各名義種の現存するタイプ標本, および一般標本を調査し, *H. tenuispinis* と *H. bleekeri* の 2 名義種を有効種と認め, 再記載した。その際に *H. tremebundus* を *H. bleekeri* の新参異名とした (Randall, 1999)。*Halichoeres tenuispinis* は中国 (廈門市と香港) と台湾に, *H. bleekeri* は韓国と日本に分布する (Randall, 1999)。

島田 (2000, 2013) は Randall (1999) の結果を紹介しつつも, 「両者 (*H. bleekeri* と *H. tenuispinis*) は形態的に非常に酷似しており, Randall 自身も亜種の可能性を否定していないため, 本書では従来どおり *H. tenuispinis* を使用した」と記したが, 後述のとおり, 両者の形態学的相違は比較的大きく, その上, 種か亜種かの判断は難しいとしても, 同種であると判断をするのは困難である。しかし, 島田 (2000, 2013) 以降, 国内の多くの図鑑や文献ではホンベラの学名として *H. tenuispinis* (あるいはミススペルで *H. tenuispinnis*) が使用されきた (例えば, 西山・本村, 2012; 池田・中坊, 2015)。

一方, Randall (1999) が韓国・日本産の有効種として再記載した *H. bleekeri* (Steindachner and Döderlein, 1887) は, *Halichoeres bleekeri* Günther, 1861 の新参同名であるため, 前者は無効とされていた (Fricke et al., 2026)。なお, *H. bleekeri* Günther, 1861 は, 現在 *Halichoeres chloropterus* (Bloch, 1791) の新参異名とされている (Parenti and Randall, 2000)。しかし, Near et al. (2025) によって *Halichoeres* が再編されたことに伴い, 後述のようにホンベラ *Halichoeres bleekeri* (原名 *PlatyGLOSSUS bleekeri*) は *Hemiulis bleekeri* となったため, 同名関係は解消される。

ホンベラ属の分類学的再編

Near et al. (2025) はベラ科魚類の包括的な分子系統解析を行い, 亜科や族, 属の再編を行った。ホンベラが含まれる従来のホンベラ属 *Halichoeres* Rüppell, 1835 は, 6 属に分割され, そのうちの 4 属 (*Halichoeres*, *Hemicoris* Bleeker, 1862, *Hemitaotoga* Bleeker, 1862, *Hemiulis* Swainson, 1839) に帰属する 20 種が日本に分布する。ホンベラ *H. bleekeri* は Near et al. (2025) に掲載されていないものの, ホンベラの姉妹種である *Halichoeres tenuispinis* が変属され *Hemiulis tenuispinis* となったため (Near et al., 2025), ホンベラの学名も *Hemiulis bleekeri* とするのが妥当である。これに伴い, 標準和名ホンベラ属に適用すべき学名は *Hemiulis* になる。

一方, 従来のホンベラ属の学名であった *Halichoeres* に帰属する日本産種はキスジキュウセン *Halichoeres hartzfeldii* (Bleeker, 1852) 1 種のみであるため, *Halichoeres* の標準和名はキスジキュウセン属 (新称) となる。なお,

松原 (1955) は *Halichoeres* をキュウセン属としたが、標準和名キュウセンには現在 *Leptojulis poecilepterus* (Temminck and Schlegel, 1845) の学名が適用されており (Near et al., 2025), 標準和名キュウセン属は *Leptojulis* Bleeker, 1862 となる。

Hemitautoga のタイプ種は *Labrus centiquadrus* Lacepède, 1801 であり、本名義種はトカラベラ *Hemitautoga hortulana* (Lacepède, 1801) の新参異名であるため (Randall, 1986), *Hemitautoga* の標準和名はトカラベラ属とするのが妥当である。なお、松原 (1955) は *Hemitautoga* を亜属として扱い、トカラベラ亜属としたため、本報告で属の標準和名としたトカラベラ属は新称ではない。

Hemicoris は日本から以下の 8 種が報告されている。本属のタイプ種 *Halichoeres variegatus* Rüppell, 1835 は日本から記録されていないため、南日本の浅海域でごく普通にみられるアカニジベラ *Hemicoris margaritacea* (Valenciennes, 1839) に基づき、アカニジベラ属 (新称) を提唱する。

旧 *Halichoeres* から再編された日本産の属と種 Near et al. (2025) と本研究に基づく旧 *Halichoeres* に含まれていた日本産全種の現在の帰属は以下のとおりである。属名の性によって種小名の語尾が変化したものも多い。

***Halichoeres* キスジキュウセン属 (新称)**

キスジキュウセン *H. hartzfeldii* (Bleeker, 1852)

***Hemicoris* アカニジベラ属 (新称)**

シチセンムスメベラ *H. batuensis* (Bleeker, 1856)

ニシキキュウセン *H. biocellata* (Schultz, 1960)

コガネキュウセン *H. chrysus* (Randall, 1981)

アカニジベラ *H. margaritacea* (Valenciennes, 1839)

ホクロキュウセン *H. melasmapoma* (Randall, 1981)

ホホワキュウセン *H. miniata* (Valenciennes, 1839)

イナズマベラ *H. nebulosa* (Valenciennes, 1839)

ツキベラ *H. orientalis* (Randall, 1999)

***Hemitautoga* トカラベラ属**

トカラベラ *H. hortulana* (Lacepède, 1801)

セイテンベラ *H. scapularis* (Bennett, 1832)

ミツボシキュウセン *H. trimaculata* (Quoy and Gaimard, 1834)

***Hemiulus* ホンベラ属**

カノコベラ *H. annularis* (Valenciennes, 1839)

クマドリキュウセン *H. argus* (Bloch and Schneider, 1801)

ホンベラ *H. bleekeri* (Steindachner and Döderlein, 1887)

アミトリキュウセン *H. leucura* (Walbaum, 1792)

ムナテンベラ *H. melanocheir* (Fowler and Bean, 1928)

カザリキュウセン *H. melanura* (Bleeker, 1851)

ムナテンベラダマシ *H. prosopeion* (Bleeker, 1854)

ゴシキキュウセン *H. richmondi* (Fowler and Bean, 1928)

ホンベラ *H. bleekeri* と *H. tenuispinis* の比較

Randall (1999) は *Halichoeres tenuispinis* (= 本研究における *Hemiulus tenuispinis*) と *Halichoeres bleekeri* (= ホンベラ *Hemiulus bleekeri*) の詳細な比較を行い、ホンベラは胸鰭条数が 13 (稀に 14) であること (*H. tenuispinis* では 14, 稀に 13 あるいは 15), 眼の中央下から前縁下にかけての suborbital pores の数が 7–11 であること (11–15), 頭長が最長背鰭軟条長の 1.95–2.3 倍であること (2.25–2.4 倍), および成魚は尾鰭基部に 1 黒色斑がないこと (黒色斑がある) から両種は識別されるとした。これらの相違に加え、Randall (1999) は両種の色彩における若干の傾向的差異を記述したが、記述文における学名の取り違えがあることや、根拠とした生鮮時 (あるいは生時) の写真が少ないこと、ホンベラのメスとする写真 (fig. 6) とオスとする写真 (fig. 7) で同一の写真が掲載されていることなど、混乱がみられるためここでは参照することが困難である。

Randall (1999: table 1) は 30 個体の *H. tenuispinis* と 24 個体のホンベラに基づき、胸鰭条数と鰓耙数の頻度分布を示した。本研究で計数したホンベラ 56 個体の両形質を Randall (1999) のデータに追加した結果 (Table 1), 胸鰭条数において両種が明瞭に識別されることが再確認された。

Julidinae ホンベラ亜科 (新称)

本亜科は 24 属 245 種を含む分類群であり (Near et al., 2025), このうち、日本からは 18 属 71 種が知られている (本村, 2026)。本亜科のタイプ属は日本に分布しないため、本亜科に帰属する属のうち、構成種数がもっとも多いホンベラ属 *Hemiulus* (36 種; Near et al., 2025) の標準和名を Julidinae に適用して、ホンベラ亜科 (新称) を提唱する。

謝 辞

ホンベラの標本調査を行い、胸鰭条数と鰓耙数を計数

Table 1. Pectoral-fin ray and gill-raker counts of *Hemiulus tenuispinis* and *H. bleekeri*.

	Pectoral-fin rays				Gill rakers			
	12	13	14	15	16	17	18	19
<i>H. tenuispinis</i>		1	28	1	2	11	11	6
<i>H. bleekeri</i>	1	77	2		4	46	24	5

Data for *H. tenuispinis* and *H. bleekeri* based on Randall (1999), plus 56 additional specimens of *H. bleekeri* examined in this study.

してくださった鹿児島大学大学院連合農学研究科リサーチアシスタントの橋本慎太郎氏、および原稿に対して適切な助言をいただいた京都大学舞鶴水産実験所の松沼瑞樹氏に深く感謝する。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 百田和幸・宗原弘幸. 2017. 北海道函館市白尻から SCUBA 潜水によって採集された北限記録 6 種を含む初記録 9 種の魚類. 北海道大学水産学部紀要, 59: 1–17.
- Fricke, R., W. N. Eschmeyer and R. van der Laan (eds.). 2026. Eschmeyer's catalog of fishes: genera, species, references. [URL](#) (23 July 2026)
- 藤原恭司・ジョン ビョル・松岡 翠・本村浩之. 2022. 奄美群島喜界島から得られた初記録の魚類 28 種および同島から確認された魚類の総種数. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 17: 88–94.
- Fujiwara, K. and H. Motomura. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Kikai Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 259 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 14: 1–73.
- Hubbs, C. L. and K. F. Lagler. 1947. Fishes of the Great Lakes region. Bulletin of Cranbrook Institute of Science, 26: i–xi + 1–186.
- 池田博美・中坊徹次. 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. xxii + 599 pp.
- Jordan, D. S. and C. L. Hubbs. 1925. Record of fishes obtained by David Starr Jordan in Japan, 1922. Memoirs of the Carnegie Museum, 10: 93–346, pls. 5–12.
- Jordan, D. S. and J. O. Snyder. 1902. A review of the labroid fishes and related forms found in the waters of Japan. Proceedings of the United States National Museum, 24: 595–662.
- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. Journal of the College of Science, Imperial University, Tokyo, 33: 1–497.
- Kamohara, T. 1958. A review of the labrid fishes found in the waters of Kochi Prefecture, Japan. Reports of the Usa Marine Biological Station, 5 (2): 1–20, pls. 1–8.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索. Parts 1–3. 石崎書店, 東京. xi + 1605 pp. + 135 pls.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 本村浩之. 2026. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 41. [URL](#)
- Near, T. J., C. D. Brownstein, C. E. Thacker and P. C. Wainwright. 2025. Phylogenetic taxonomy of wrasses and parrotfishes (Labridae). Bulletin of the Peabody Museum of Natural History, 66: 263–338.
- 日本魚類学会. 2025. 魚類の標準和名の命名ガイドライン. [URL](#)
- 西山一彦・本村浩之. 2012. 日本のベラ大図鑑. 東方出版, 大阪. 303 pp.
- Parenti, P. and J. E. Randall. 2000. An annotated checklist of the species of the labroid fish families Labridae and Scaridae. Ichthyological Bulletin of the J. L. B. Smith Institute of Ichthyology, 68: 1–97.
- Randall, J. E. 1986. Family No. 220: Labridae, pp. 683–706, pls. 89–105, 109. In Smith, M. M. and P. C. Heemstra (eds.) Smiths' sea fishes. Macmillan South Africa, Johannesburg.
- Randall, J. E. 1999. *Halichoeres bleekeri* (Steindachner & Döderlein), a valid Japanese species of labrid fish, distinct from *H. tenuispinis* (Günther) from China. Ichthyological Research, 46: 225–231.
- 島田和彦. 2000. ベラ科, pp. 969–1013, 1582–1589. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 2 版. 東海大学出版会, 東京.
- 島田和彦. 2013. ベラ科, pp. 1088–1136, 2045–2056. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 鈴木将太・太齋彰浩・阿部拓三. 2025. 南三陸町自然環境活用センターの収蔵標本に基づく宮城県志津川湾の魚類相と近年の動向. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 51:1–24.
- 外山太一郎・山崎和哉・藤又賢司・丹野晶博・納谷典明・大森健策・外山怜子. 2025. 茨城県平磯海岸の魚類相: 県初記録 39 種を含む 127 種の記録. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 52:13–45.